

「社会的思考を定着させる指導の工夫」

坂井 宏行
社会科 寺田 康彦
上谷 知未

1. テーマ設定の理由

学習指導要領には社会科の目標として「公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」とある。本校社会科ではこれを受け、将来を見据えた社会の形成者たるに必要な力を「社会の一員として自分の意見をもつために必要な力」と捉え、そのために必要な思考力を「社会的思考」と定義した。ここでいう「社会的思考」とは、多面的・多角的に社会的事象を捉え、根拠に基づいて論理的に考察することを指す。そして、前年度は「社会的思考を促す指導と評価～根拠を明確にした考察について～」と題して研究を進めた。

前年度の研究を通して、生徒へのアンケートや実践の様子から以下のことに気付いた。まず、「多面的」もしくは「多角的」に考察する力は確実に生徒に身に付いてきたが、「多面的・多角的」に考察する力となると、思考が複雑化し、十分な定着が見られなかった。また、生徒は根拠の重要性を理解し、おおむね根拠を明らかにできるようになってきたが、自分の考えた根拠が適切かどうか自信をもてない場面もみられた。以上のことから、「社会的思考」が少しずつ身に付いてきたものの、さらなる定着が今後の課題であると考えられる。

一方、中教審答申では教科の改善の基本方針として「社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する」とある。中学校社会科の学習を通して、教科の知識だけではなく、社会的事象の見方や考え方を生徒に身に付けさせることで、あらゆる場面で活用していける思考力の育成を重視していかなければならない。そのためには、前述の「社会的思考」を実生活に活かせる段階まで生徒に定着させていく必要がある。

以上の前年度研究のふりかえりや中教審答申の内容から、今年度の研究は前年度に取り組んだ「社会的思考」のさらなる定着を図ることを目的とし、研究テーマを設定した。今年度の研究では、本校社会科としてこれまで取り組んできた実践を分析、整理し、年間指導計画の中に組み入れていくことで、日々の授業実践のなかに適切な考察の場面を設定し、生徒に「社会的思考」を定着させることを考えた。

具体的な実践として、「社会的思考」を生徒に身に付けさせるために必要となる思考の型や、学習の手立てをこれまでの実践を分析して整理すること。また年間指導計画の中で、どの単元や題材が「社会的思考」を育むために適しているかを吟味し、整理することが挙げられる。特に本校社会科では「多面的・多角的」な考察の研究を始めて3年目となるが、「多面的・多角的」な考察については、すべての単元で実践することは学習内容の特性の違いから現実的に難しく、適切な単元や題材において計画的に実践していくことが必要であると考えている。これまでの実践の積み重ねを基に適切な単元や題材を分析し、年間指導計画にその成果を取り入れたい。また、そうすることで思考力の評価場面も明確となり、評価を行っていく上でも有益であると考ええる。

2. 課題を解決するための思考のあり方について

(1) 重視する思考の型とその定着に向けた取組

「社会的思考」の定着を図るために以下の2つの思考の型を重視することにした。

①「多面的・多角的」に捉える

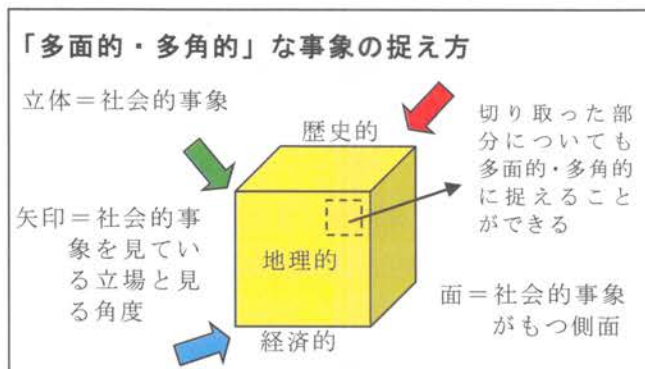
社会科の目標に「諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」とあるが、多面的・多角的な考察というのは社会科特有の思考である。本校社会科では「多面的・多角的」という社会的事象の捉え方を2つに分け、以下のように定義した。また、右の図は社会的事象を捉えるイメージ図である。

ア「多面的」

社会的事象が「地理的、歴史的、政治的、社会的、法的、文化的」といった様々な側面をもっていること。

イ「多角的」

社会的事象をみる主体（立場）に様々なものがあり、見る角度が異なること。

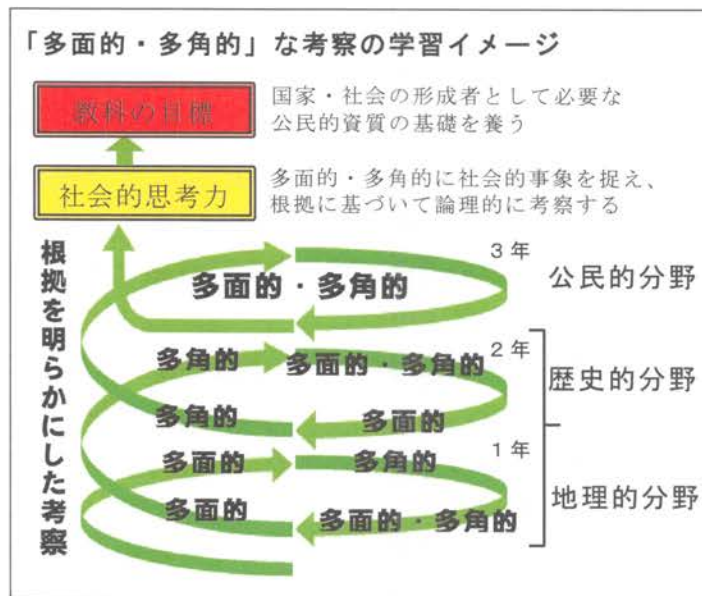


そして、この2つの捉え方を同時に用いて考察することを「多面的・多角的」な考察とし、教科で重視すべき思考の型とした。

本来であれば「多面的・多角的」な考察を重ねることでその定着を図ることができるわけであるが、本校では、あえて「多面的」「多角的」を分けて考察させることにも取り組んだ。「多面的・多角的」な考察は生徒にとって難解な部分があり、これを「多面的」な考察のみ、「多角的」な考察のみといった学習活動を行うことで、生徒にとってより円滑な理解が得られるのではないかと考えた。また、これまでの実践から地理的分野は自然条件、社会的条件など「多面的」に捉えやすいこと。歴史的分野は支配者と被支配者、様々な身分など「多角的」に捉えやすいこと。公民的分野は「多面的・多角的」に捉えやすいことが分かってきた。

以上のことから、「多面的・多角的」に社会的事象を捉え、考察させるためには、右の図にあるようなスパイラル構造を用いた実践が効果的なのではないかと考えた。

地理的分野では「多面的」、歴史的分野では「多角的」というように、学習内容に適した事象の捉え方を指導するとともに、生徒の習熟の度合いを踏まえて適切な単元や題材で「多面的・多角的」に考察する場面を設定していく。このように多面的な考察 → 多角的な考察 → 多面的・多角的な考察といったスパイラル構造を意識することで、1・2年時において「多面的・多角的」に考察する基本的な力が身に付き、それを基にして3年時の公民的分野では「多面的・多角的」なより深い考察が促されると考えた。また後述するように、3年間を通して根拠を明らかにした考察が生徒に身に付くような取組も同時に行っていく必要がある。



②根拠を明らかにする

「多面的・多角的」に社会的事象を捉えることができて、その主張が曖昧で説得力に乏しいものだとは教科の目標を達成したとは言えない。「多面的・多角的」な考察に加えて、論理的に考察するための力が求められると考えられる。本校社会科では論理的に考察する力を身に付けさせるためには、根拠を明らかにすることが必要であると考え、これを重視すべき思考の型とした。学習指導要領解説にも公民的分野の目標として「どのような根拠で結論を導き出したのかを、具体的、論理的に説明させるなどして、第三者に学習で得た結論とその結論を導き出した過程をより分かりやすく効果的に示す力」が必要とされている。

ここでいう根拠とは、資料（教科書、資料集を含む）から得られた情報、既習事項、一般的な概念などを考えている。これらを揺るぎない情報と捉え、それを基に考察する力の定着を図った。その際、用いる根拠が妥当であるかについても重視した。いくら根拠が明確であっても、それが主張に対して不十分であれば論理的な考察とは言えないと考えたためである。

（2）よりよく思考する手立てについて

①トゥールミンモデルの活用

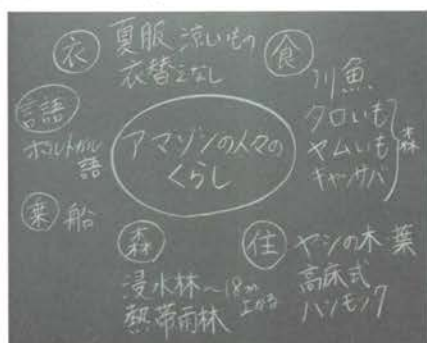
上記の思考の型を生徒に身に付けさせるためには、主張に対して「多面的・多角的に捉えているか」「何が根拠となっているか」ということを生徒自身が分析し、自己評価や相互評価を促すことが必要であると考えた。そして、そのためには思考の流れを可視化する必要があると考えた。

そこで思考の可視化を図るためにトゥールミンモデルを用いることにした。トゥールミンモデルは本来ディベートなどで用いる議論レイアウトであり、非常に多くの要素から成り立っている。しかし、本研究ではトゥールミンモデルの完全な理解ではなく、D（根拠）、W（理由付け）、C（結論）を明確に分けることのみを目的とし、それらの3つの要素のみを扱うことにした。Dが根拠となり、Wが根拠に対する解釈となる。これにより、何が根拠となっているかが明確に可視化される。また、複数の根拠を用いることで「多面的」な考察が、複数の立場から解釈することで「多角的」な考察が、それぞれ行われているかを判断することもできると考えた。

②思考ツールの活用

社会科では、社会的事象を「多面的・多角的」に捉える必要がある。そのため、事象を関連付けて考えることや事象を比較して考えることが基本的な思考の型となる。その際、思考の手立てとして、放射状のイメージマップ、対比表、ランキング表、複数の主題図の重ね合わせなどを用いた。

イメージマップ



対比表

ただし、統一基準を決めて行動に移さなければならない

＜農業＞	生産額	＜工業＞	生産額
1. フランス	小麦	1. ドイツ	自動車・ビール
2. ドイツ	大麦	2. イタリア	工作機械
3. イタリア	オリーブ	3. フランス	
4. ス페인		4. イギリス	
5. イタリア		5. ス페인	

西ヨーロッパの国が豊かであり、富金が高い。東西の経済格差が大きい。

主題図の重ね合わせ



(3) 形成的評価の重視

思考の型の定着を図るには、適切な形成的評価を継続して行うことが重要であると考えられる。そこで、発表などでの発言内容やワークシート、レポートの記述内容を評価対象として、それらの可視化、共有を図ることを考えた。具体的にはツールミンモデルの利用や板書の工夫、教材提示装置によるワークシートの提示などの実践を行った。これにより生徒の自己評価や相互評価が容易になり、評価の妥当性を高めることができる。思考の型についての評価としては以下の点があげられる。

- ・複数の根拠を示しているか（「多面的」に捉える）。
- ・複数の視点から考察しているか（「多角的」に捉える）。
- ・根拠が明確であるか（根拠を明らかにする）。
- ・主張に対して根拠が適切か（根拠の妥当性）。

これらの点について生徒に評価させることで、思考の型が身に付くと考えた。

また、同様な点において、教師の評価も重要である。特に評価したことを適時生徒にフィードバックすることで、生徒の自信を高めることができると考えられる。

(4) 課題設定のあり方について

教科の目標を達成するための課題を設定する際には「なぜ～なのか」という問いかけを重視した。このような知の再構成を必要とする課題は、考えても簡単に答えがでないため、資料を見たり、話し合ったりする活動が必然的に促され、より思考を深めることが可能となるからである。さらに、二択による価値判断を伴う課題や、代替案、改善案を考えさせる課題なども思考力を身に付けさせる上では有効であると考えられる。

また、このような課題を設定する上で、以下の点について意識することにした。

- ・授業、もしくは単元で取り扱いたい社会的事象は何か。
- ・社会的事象がもつ複数の側面の中から、授業で取り上げるものは何か（「多面的」に捉える）。
- ・考察させるときの立場は何か（「多角的」に捉える）。
- ・考察に必要な資料は何か（根拠を明らかにする）。
- ・考察に必要な生徒の活動は何か。

これらを意識することで、「多面的・多角的」（もしくはそのいずれか）な考察や根拠を明らかにした考察を必要とする課題設定が可能になると考えられる。

3. 各学年の実践

1年の実践

1年2組 社会科学学習指導案

平成25年10月25日(金)

場所 1年2組教室

(1) 単元名 ヨーロッパ州 (第3次中第1時)

(2) 題材名 進むヨーロッパの統合

(3) ねらい

- ・ヨーロッパがどのように統合されているのかを、経済の側面から理解することができる。
- ・EU加盟国内で経済格差があることに気付くことができる。

(4) 評価の観点と規準

- ・EU加盟国の中で豊かな国々の共通点を、複数の資料から読み取ったことを関連付けることによって指摘することができる。

社会的な思考・判断・表現【観点②】

(5) 本時の取組のポイント

複数の資料から読み取ったことを比較したり、関連付けたりすることでEUの東西で経済格差がみられることに気付かせる。まず、経済的に豊かな国々を、工業生産額、農業生産額、国民総所得の3つの指標からランキングした表を作成する。その後で、豊かな国々の共通点を、各国の位置、EUに加盟した時期などを示す資料と関連付けて明らかにする。また、そうすることでEU加盟国それぞれの経済的立場をつかませたい。

(6) 本時の展開

学習活動・内容	教師の指導・支援及び留意点 ○評価と方法 []	時間
1 EUについて関心をもつ。	<ul style="list-style-type: none">・CEマークが付いた身近な商品を示す。・EU加盟国の国名と位置、加盟国数、加盟国の拡大の様子を資料から読み取らせ、加盟国が拡大している理由に関心をもたせる。	10
EUはどのように統合しているのだろう		
2 EUの目的と経済的な統合の様子について知る。	<ul style="list-style-type: none">・EUに加盟した場合のメリットを資料から読み取らせる。・EUの2つの目的を教科書の本文から読み取らせる。・経済的な統合により経済活動の規模が大きくなったことを、面積、人口、GDPの各資料で確認する。・加盟国同士での貿易がさかんであることを資料から確認する。・加盟国内で経済活動が自由に行われると、それぞれの加盟国はどのような産業の売り上げを伸ばそうとすることを予想させる。・農業や工業で売り上げを伸ばそうとする国としてふさわしい所を、農業生産額、工業生産額上位5か国(主題図)から読み取らせ、両者を比較できる表を作成する。・各国の主な輸出品を確認する。・表にまとめた国々のGNIの順位を資料から読み取らせ、表に追記する。・表の国々を見て気付くことを発表させる。 <p>○評価 表の国々の共通点を、主題図(EU加盟国の拡大の様子)から読み取れることと関連付けて表現している。</p> <p>[ノートの内容、発言内容] 【観点②】</p>	32
3 EU加盟国内に経済格差があることについて知る。		
4 EUの経済的な統合の様子と経済格差の存在を映像資料を通して確認する。	<ul style="list-style-type: none">・ビデオ教材(NHK高校講座地理「ヨーロッパへようこそ(1)～EUによる地域統合～」)を視聴させる。・CEマークの意味を経済格差と関連付けて理解させる。・他にどのような面で統合をしているのかを考えさせる。	8

10/25 進むヨーロッパ統合 P60~61

〈ヨーロッパはどのように統合されているのか理解しよう!〉

★統合のようす

EU 1993年 (12) 加盟国 25ヶ国へ

★加盟すると
EU
・人、商品、サービス、資金、労働者の移動が自由になる
・輸出入品に関税がかからなくなる
・共通通貨

→ 加盟国内の経済活動が活発になる (GDPはEU全体で世界トップ)
ただし、EUで統一した基準で生産、販売する (Cのマーク)

資料3

★農業 (生産額) や 46 (1) 資源 8.9

1. フランス
2. ドイツ
3. イタリア
4. スペイン
5. オランダ

★工業 (4) 49.9 資源 13.6 GNI

1. ドイツ
2. フランス
3. イタリア
4. イギリス
5. スペイン

EUに早くから加盟している西ヨーロッパの国が豊かになっている
(東西で経済格差がある)

★TVから

・ロコ (テレビ) 10/20
・イタリア (1995年) 10/20
・インド → 10/20
・50/10/20
・10/20/10/20

・東西の経済
・東西
・インド
・インド

ヨーロッパの課題とロジック 10/20

〈EUの課題から、ヨーロッパがどんなところかをもう一度考えてみよう!〉

- ・EU (12) → 25 西から東へ拡大中
- ・経済力は世界トップ (GDP: GNI)
- ・EU基準を適用する必要はある。国民経済
- ・域内には経済格差がある

★統合の分野



★EUは国になるのか?

- ・国にならなければならない
- ・EU加盟国には、補填が資料右下図からわかるように軍事に関する考え方が大きく異なっている
- ・資料書P58の国図からわかるように、民族 (人種)、言語、宗教、文化、歴史はさまざまである
- ・また、フランスは共和制、イギリスは王国というように、国としてのあり方も異なる
- ・もし、EUが国となれば、アメリカ合衆国のような、多民族国家になることになる
- ・明白である。これは、さまざまな争いを生むことでもある
- ・EUは戦争を防ぐためにつくられた組織だ
- ・もし、EUは国にならなければならない

★TVから

・(12) (独) 33 カルンスタット、レープスブルク
・(14) 33 カルンスタット、レープスブルク
・(14) 33 カルンスタット、レープスブルク
・(14) 33 カルンスタット、レープスブルク
・(14) 33 カルンスタット、レープスブルク



(7) 授業の考察

本時は、ヨーロッパ州を全4次で構成した第3次にあたる。

- | | |
|-----------------|------------|
| 第1次 ヨーロッパ州をながめて | 2時間 |
| 第2次 ヨーロッパ文化の共通性 | 1時間 |
| 第3次 進むヨーロッパの統合 | 2時間【本時1/2】 |
| 第4次 ヨーロッパの課題 | 1時間 |

1年生の地理的分野では、ヨーロッパ州を、地理的事象を

「多面的・多角的」に考察する単位として位置付けた。単位を通して考察の対象とする具体的な地理的事象は、「EUによるヨーロッパの統合」である。ヨーロッパの統合による利点と課題を、経済的、政治的、社会的、歴史的な側面から、主に各国の立場を通して考察させていく。そのことを通して、ヨーロッパがどんな特色をもっている地域かを思考・判断・表現させることを単位の中心的なねらいとした。

そこで、第3次に「EUは1つの国になるべきか」という学習課題を設定し、ヨーロッパの統合による利点と課題を多面的・多角的に考察させた。第4次では、学習課題に対して「賛成と反対」の立場で意見を発表し合い、発表内容を基にしてヨーロッパの地域的特色を記述させた。第1～3次の前半までは、学習課題を解決するための知識を身に付けさせることを目的とした。

本時にあたる第3次で、EUが経済的に統合することで全体としては豊かになっているが、加盟国内で経済格差が大きいことをつかませた。経済格差があることは、加盟国の国民総所得を示した1つの主題図から容易に読み取ることができる。しかし、本時では、複数の資料から読み取ったことを比較したり、関連付けたりすることで、豊かな国々がもつ特徴を具体的につかませながら、経済的な統合の実態を捉えさせるようにした。また、そのことを通して、資料活用能力を身に付けさせるとともに、資料から読み取ったこととそこから明らかになったことを、考察するための根拠として活用できるようにすることをねらった。

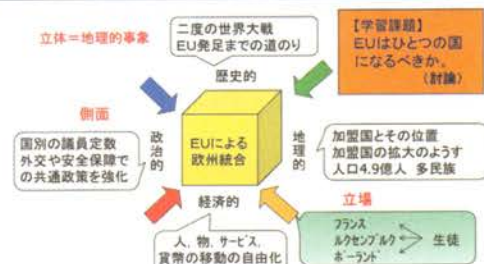
授業では、生徒に、農業生産額及び工業生産額の上位5か国をランキングした表を作成させ、そこに国民総生産額の世界順位を書き込ませた。これを見て気付くことをノートに書かせてみたところ、豊かな国が、西ヨーロッパにあること、海に面していること、EUに早くから加盟した国であることの全部又はいずれかを指摘することができていた。その際、加盟国拡大の様子を示した主題図から読み取ったことと関連付けて考えることができていた。発表後、EU各国の一人あたりの国民総所得を示した主題図を見て、加盟国の東西で経済格差があることを改めて確認した。

1年生では、考察するための根拠となる情報を資料から適切に読み取ることやその技能を身に付けることに重点を置いて指導している。その際、複数の資料から読み取ったことを比較したり、関連付けたりする学習活動をできるだけ設定し、多面的・多角的な捉え方が促されるよう努めている。

本時で取り扱った中心な地理的事象は、EUによる統合のうちの経済的な側面であり、この側面を、統合による利点と課題の2つの側面から捉えさせたものである。多面的に捉えることを通して、生徒は、加盟国内に豊かな国と貧しい国の2つの立場があることに気付くことになる。

単元のまとめとなる第4次では、豊かな国と貧しい国のそれぞれの立場で発表ができていた。その他の立場として、国の人口規模の大小、労働者などがみられた。一方、多面的な捉え方としては、資料から読み取ったことをもとに、経済、財政、政治、民族、文化、安全保障などの側面からの意見がみられた。また、多面的・多角的に考察したことによるものと考えられるが、普段発言しない生徒を含め、多くの生徒が発言することができた。

旧学習指導要領のもとでは、ヨーロッパ州を2学年で履修していた。そのため、1年生でどの程度の考察ができるかやや不安な面もあった。しかし、資料を十分用意し、適切に読み取らせたことで、地理的事象を捉える立場や事象の側面が概ね明確になった発表ができたと考える。さらに、効率と公正の考え方も少数だが出されていた。



(8) 成果と課題

○多面的・多角的に考察することについて

1年生の地理的分野では、「1つの地理的事象を多面的・多角的に捉える力」と、考察の根拠を明確するために必要となる「資料を適切に読み取る力」を身に付けさせることを指導の重点としている。

前者については、事象を多面的・多角的に捉えさせるために、複数の資料から読み取ったことを比較したり、関連付けたりする学習活動を多用した。その際、イメージマップ、対比表、ランキング表などの作成や複数の主題図の重ね合わせなどの方法を用いた。生徒へのアンケートから、比較したり、関連付けたりするといった思考力が複数の資料を読み取る活動を通して身に付きつつあることが分かった。

アンケートでは、「多角的にものごとを考えることができた」と答えた生徒の数が、「多面的にものごとを考えることができた」と答えた生徒の2倍となった。これは、昨年度の1年生とほぼ同じ結果であり、1年生は、立場でものごとを考える傾向があることが分かってきた。社会科の授業以外の場面でも、同じように立場からものごとを考える傾向がみられた。この結果は、人物や国などの立場から事象を考える方が1年生には分かりやすいことを示していると考えられる。とすれば、複数の立場から事象がもつ複数の側面に気付くような指導過程や手立てを工夫する必要があることになる。

その一方で、世界の諸地域の学習では、ヨーロッパ州以降の単元で、多面的に地理的事象を捉えることができたとする生徒が多かったことが、アンケートから分かった。「多面的」「多角的」のそれぞれに重きを置きながら指導を繰り返す中で、徐々にではあるが多面的な捉え方もできるようになってきたと考えられる。

1年生では、1つの地理的事象について多面的・多角的に考察することを中心に実践をしてきた。各州の学習が終わるにつれ、州ごとの比較が行えるようになる。そうすると歴史的分野における「時代を大観する学習」のように、州ごとの比較や関連付けによって、さらにその州の地域的特色を明らかにできると考える。この場合、「複数の地理的事象を多面的・多角的に捉える学習」となり、より深く考察させることができるものとする。

○資料を適切に読み取ることについて

資料を読み取るときは、「資料から読み取れることと、読み取ったことから解釈したことを分けること」と「自分の考えをもつときに、そのように考えた理由と根拠（どの資料のどの事実か）を示すこと」を意識させた。

地理の授業を始めたばかりの頃は、雨温図を読み取る場面などにみられるように、読み取ったことに自分の解釈やあいまいな情報を加えて発表する生徒が多かった。現在は、事実と解釈を分けることができるようになってきた。生徒へのアンケートでも、全体の約78%が「何が根拠かの見分けはだいたいしている」と答えている。

しかし、1年生では、トゥールミンモデルをまだ導入していないこともあり、自分の主張、理由付け、根拠となる事実の3つが妥当であるかどうかを明確にはつかめていないと考えられる。そのため、今後は、トゥールミンモデルの導入によって根拠の妥当性を高める段階に進みたいと考える。

(生徒のアンケートより)

- ・多面的にものごとを考えることができたと思う学習内容は、地理で、円・帯・棒グラフ、雨温図などから読み取って考えること、比較して気づいたことを考えることだと思います。
- ・気候や分布地域などのグラフや表を比べて、その違いから、それぞれの特色を見出すことができ、多面的にとらえられるようになった。
- ・地理のときに、グラフの変化を読み取るといった場面で、どうしてこんなふうになったのかといったことを多面的・多角的に考えることができたと思います。また、その結果、他の面との結びつきがみられたため、より一層理解が深まり、年代ごとの変化についてよく学ぶことができました。

○形成的評価や思考過程の可視化について

多面的・多角的に事象を捉える力を育成するために、単元の終末に、発表や討論などを取り入れて、生徒の多様な意見を共有できる機会を設けた。その際、多面的・多角的に事象を捉えていることを、形成的評価によって意識付けておくが必要だと考える。例えば、「様々な面あるいは様々な立場から見ると、気付かなかったことが見えてくる（分かる）」といった平易な言葉を使用し、その重要性を理解させることである。また、生徒が発表した内容を黒板に書く際に、立場や側面を示す語句に目印を付けることで、多面的・多角的に考察できるように促していくことも効果的である。

- (1) 単元名 日本 の諸地域 「近畿地方」 ～歴史的な背景に注目して～ (第2次中第2時)
- (2) 題材名 都市と郊外の成り立ち
- (3) ねらい
- ・大阪大都市圏の交通網の整備とニュータウンなどの都市の発達の特徴について、多面的・多角的に考察し、表現することができる。
 - ・大阪の商業について、その歴史的な変化と現代における課題・要因について理解している。
- (4) 評価の観点と規準
- ・大阪の商業がどのように発展してきたかについて、複数の資料から読み取った情報を関連付けて考えることができる。
社会的な思考・判断・表現 【観点②】
- (5) 本時の取組のポイント
- 本時の授業では、中核となる社会的事象について、他の事象と関連付けながら、なぜそのような地理的事象がみられるのかを追究していく動態地誌的な学習を展開していく。景観写真やグラフなどの資料から、学習課題を見出し、追究していく授業を構成することで、生徒自らが学ぶ力を伸ばすことができると考えている。
- また、中核となる事象を多面的・多角的に考察しながら課題を解決していくために、「根拠を明らかにする」ことを重視し、その手立てとしてワークシートによる可視化を用いた。
- (6) 本時の展開

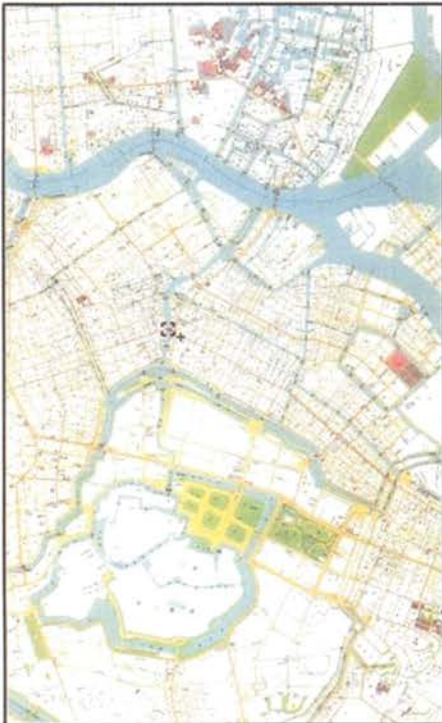
学習活動・内容	教師の指導・支援及び留意点 ○評価と方法 []	時間
1 都道府県別の商店街数のグラフから、課題を生み出す。	・都道府県別の商店街数のグラフ (注1) や、卸売業の販売額に占める県別割合のグラフなどを見せていくことで、他の都道府県よりも大阪府に商店が多いことに着目させ、関心をもたせる。	10
大阪のまちは、どのように発展し変化してきたのだろうか？		
2 既習学習や本時の資料を基に、課題について考える。	<div>大阪府の商店街の数が、全国一多いのはなぜだろうか？</div> <ul style="list-style-type: none">・与えられた資料などを根拠として、様々な側面から考えるように促す。・大阪には、どんな人がどんなものを買いに来るのかを考えさせ大阪の歴史的背景に触れさせる。 ○評価 大阪の商業がどのように発展してきたかについて、複数の資料から読み取った情報を関連付けて考えることができている。 [ワークシートの内容と発表] 【観点②】 <ul style="list-style-type: none">・隣の生徒とワークシートを見せ合い、他者評価をさせる。	25
3 近畿地方の経済の復権をめざして「関西国際空港」や「U.S.J」が計画的につくられた理由と、これらが抱えている課題について考える。	<div>U.S.Jは、どうして大阪湾岸にできたのだろうか？</div> <ul style="list-style-type: none">・阪急電鉄などの私鉄が乗客を増やすための工夫から、郊外が開発されていったことを理解させる。・今日学んだことをヒントにして、様々な側面から根拠立てて考えるよう助言する。・「過密問題」や「阪神工業地帯の地位低下」などの対策として郊外の開発などに取り組んでいることに気付かせると同時に、社会的環境の変化が生活に与える影響についても考えさせる。	10
4 本時と既習学習を振り返り、課題に対して歴史を背景としてまとめる。	・本時の課題について、歴史的視点から振り返りを書かせる。 ・授業のまとめを基に、できるだけ多くの生徒に感想を発表させる。	5

(注1) [出典] 経済産業省 商業統計 (H19年商業統計表「立地環境特性別統計編 (小売業) ・立地第10表」より) 商業集積地区における実数

大阪古地図



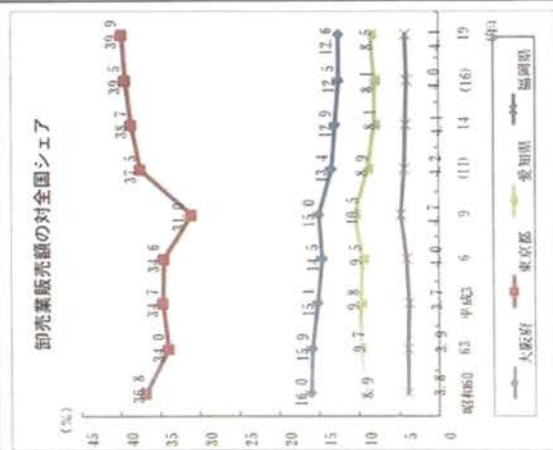
大江戸古地図



金沢古地図

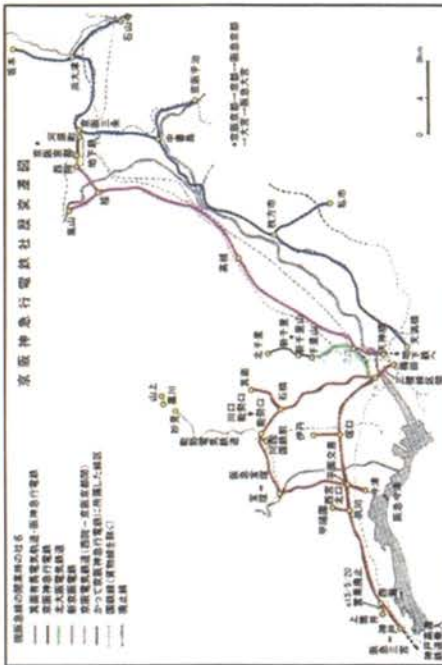


【生徒に配付した資料】



阪急電鉄の歴史と路線図の発展

年次	路線名	備考
1907 (明治40) 年	大阪府有軌電車線 (後の阪急電車線) 開業	
3月10日	開田 - 宝塚間 (宝塚本線) 石橋 - 箕面間 (箕面線)	
6月	池田支那方面住宅地への売出しを開始	
7月1日	電灯電力供給事業を開始	
11月1日	阪急自動車線 (後の宝塚・三宮・三軒茶屋線) 開業	
5月1日	宝塚線 (後の宝塚・三宮・三軒茶屋線) 開業	
7月1日	阪神電車線 (現在の宝塚線) を開業	
2月4日	阪神電車線 (現在の宝塚線) を開業	
1918 (大正7) 年	阪神電車線 (現在の宝塚線) を開業	
1920 (大正9) 年	十三 - 西宮間 (西宮線) を開業	
4月1日	十三 - 西宮間 (西宮線) を開業	
7月1日	十三 - 西宮間 (西宮線) を開業	
9月2日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
10月25日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
7月15日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
10月1日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
10月15日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
12月18日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
1月16日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
11月1日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
4月15日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
7月10日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
3月31日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
8月	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
1月23日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
4月1日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
8月29日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
6月17日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
3月10日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	
3月10日	宝塚 - 西宮北口間 (西宮線) を開業	



阪急電鉄の前身は、明治13年に設立された「阪急電鉄」で、その後「阪急電鉄」が「阪急電鉄」に改称された。この「阪急電鉄」は、明治13年に設立された「阪急電鉄」の前身である。

都府県	事業所数		従業員数		年間商品販売額	
	実数	構成比	実数(人)	構成比	実数(億円)	構成比
全国	334,799	100%	3,526,306	100%	4,135,317	100%
東京都	47,270	14.1%	795,902	22.6%	1,649,324	39.9%
大阪府	32,985	9.9%	403,270	11.4%	520,097	12.6%
愛知県	22,848	6.8%	258,318	7.3%	351,517	8.5%

都府県	事業所数		従業員数		年間商品販売額	
	実数	構成比	実数(人)	構成比	実数(億円)	構成比
全国	1,471,954	100%	11,105,668	100%	5,482,317	100%
北海道	54,258	4.0%	443,193	4.2%	118,134	3.3%
埼玉県	56,427	3.8%	467,022	4.2%	151,539	2.8%
東京都	140,365	10.2%	1,574,029	14.2%	1,822,313	33.3%
神奈川県	81,716	5.5%	666,517	5.5%	328,470	3.8%
愛知県	80,001	5.4%	664,512	6.3%	434,432	7.9%
大阪府	107,650	7.3%	913,217	8.2%	616,602	11.2%
福岡県	64,043	4.3%	478,210	4.3%	221,264	4.0%

(7) 授業の考察

本時は、総時数5時間で構成した近畿地方の第2次中第2時にあたる授業である。

本時の授業では、「大阪のまちの発展と変化」という中核となる地理的事象について、他の事象と関連付けながら、「複数の側面と立場から社会的事象を捉えさせる学習活動」と「言語活動」を組み合わせた教材の開発についての実践を行った。内容的には、大阪のまちの発展と変化について、歴史、社会、自然、産業、人口、交通などの側面から、政府、大阪府民（大阪市民）、消費者、小売業者、生産者といった様々な立場を通して考察させていった。そのことによって、大阪がもっている特徴を、思考・判断・表現させることを単元の中心的なねらいとした。これは、与えられた資料を基にして、それぞれが明確な根拠をもち、多面的・多角的に考察したことを基に説明ができるという、本校で意識している社会科の授業スタイルをさらに定着させるための取組である。

具体的には、大阪のまちが発展してきた理由とその後の変化について、東京と比較したり与えられた資料と関連付けたりしながら「多面的・多角的」に考えさせ、発表させた。生徒は、古地図や「天下の台所」などの既習事項を根拠として、大阪のまちの発展を読み取るであろうことは予想できるが、それ以外に、その他の資料や東京・名古屋などの大都市圏の実態と比較したり、関連付けたりすることによって大阪のまちの発展及び変化を捉えることをねらいとした。

授業では、都道府県別の商店街数のグラフや卸売業の販売額に占める県別割合のグラフなどを根拠として、大阪府に商店街が多い理由を様々な視点から考えることができていた。例えば、古地図を見て「江戸時代から問屋が多かった」という歴史的側面からの情報を読み取ったり、阪急電鉄の路線図の資料や地図から「交通網が発達しているため」などの交通面における情報を読み取ることができた。また、人口を根拠に「大消費地であり、品物がよく売れる」という情報を引き出す生徒もいた。さらに、既習事項である「株仲間」や「琵琶湖の水運」といった歴史的側面に気付く生徒も多かった。そして、このようにして得たいくつかの情報を組み合わせて、「狭い大阪平野に多くの人口があるから、商店街が多いんだ」などと考える生徒も出てきた。

一方、「過密問題」が生じていることや、卸売業の変化の資料などから「大阪の経済的地位の低下」に気付き、それらの対策として郊外の開発の必要性に結び付けることができた生徒もいた。そこから、U S Jや関西国際空港の立地について考察することで、大阪の経済復興への努力についての認識を新たにしていた。

また、本時の授業では、生徒が説明した内容を通して思考が深まったかどうかを評価した。さらに、その発表や他の生徒の意見を基に、ワークシートの内容を隣の生徒と見せ合うことで他者評価も行わせた。このことで、自分では気付かなかった考えを共有することができ、思考を深めることにつながったと考える。

なお、この授業で、『大阪のまちの発展と変化』という地理的事象を多面的・多角的に捉えると、右上図のようなイメージとなる。

授業の終末に、本時の課題について歴史的視点からのふりかえりをさせたが、「大阪は古くから天下の台所として栄えた伝統があり、株仲間の歴史のよさが残り、町＝商品のブランド性をもち、今でも全国各地から様々なものを買いに来る場所である。また、平野が狭いという欠点や経済的地位の低下を解消するために郊外の開発が進められた」など、様々な情報を関連付けてまとめることができた。

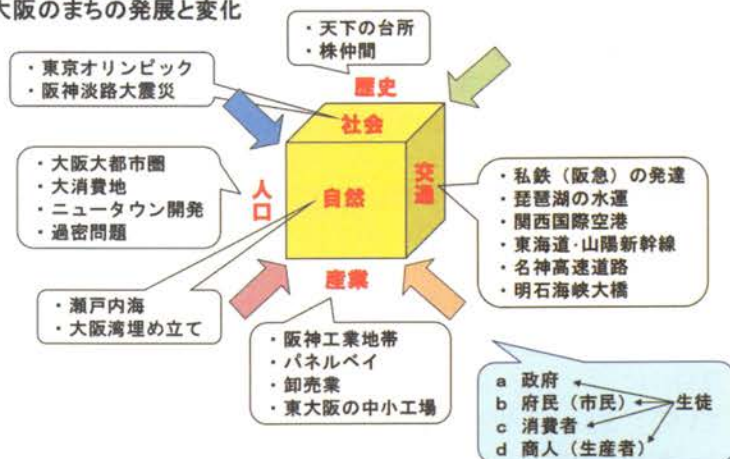
以上のように、1年時にある程度身に付けてきた、根拠となる情報を適切に読み取る力をさらに定着させ、根拠を示して説明することに主眼を置いて取り組んできた。同時に、より多くの資料を提供し、それらの資料を比較したり、関連付けたりしながら、多面的・多角的な捉え方ができるような授業を設定できるように心がけた。

(8) 成果と課題

これまでの実践によって、生徒には社会的事象を多角的に捉えるという意識は概ね身に付いてきているが、多面的に捉える意識はやや弱かったように思える。しかし、「多面的・多角的を意識して」と繰り返し授業で指示していくにつれて、少しずつその意識が高まっていったようである。もちろん、多面的・多角的に事象を捉える力を定着させるためには、教師側もそのことを意図した授業を設定していかなければならない。

年末に「多面的・多角的にものごとを考えること」についてのアンケートを採った結果、昨年度と比較すると次のような変容がみられた。

立体＝地理的事象
大阪のまちの発展と変化



・多面的・多角的にものごとを考えられるようになったと思う。

31人 → 41人

・多面的にはものごとを考えられるようになったと思う。

43人 → 48人

○多角的にはものごとを考えられるようになったと思う。

66人 → 56人

・どちらともできていないと思う。

15人 → 5人

また、多面的・多角的にものごとを考えるための「根拠」について聞いてみた結果は、以下のとおりである。

・何が根拠かの見分けがついていると思う。

47人 → 20人

○何が根拠かの見分けはだいたいついていると思う。

104人 → 121人

・何が根拠か見分けがつけられていないと思う。

4人 → 9人

分析すると、社会的事象を「多角的に考えられるようになった」と答えた生徒の数は、以前よりもやや減少している。

しかし、「多面的・多角的に考えられるようになった」と答えた生徒の数が増加していることや、生徒の意見発表や作品などの成果物からみると、「多面的・多角的に捉える力」は着実に伸びてきているといえよう。また、何が根拠かの見分けについては、自信をもって「見分けがついている」という生徒が減っているのに対し、「見分けがだいたいついている」という生徒と「見分けがつけられていない」と答えた生徒が増えた結果となった。つまり、いまだに「事実」と「解釈」を混同している生徒もみられるので、さらなる定着のための手立てを考える必要性を感じた。

これらのことから、今まで以上に学習内容を焦点化していく必要性と、事象を見る視点や立場を引き出す問題意識を常にもたせていかなければならないと反省させられた。

ただ、社会科の授業で培った力が、他教科等の授業場面や授業以外の場面においても意識できる生徒が多くなってきていることは大きな成果であるといえよう。実際に「自然に多面的・多角的を意識した」とか、「トゥールミンモデルに基づいて根拠立てて考えることができるようになった」という、他教科の授業における声から実感できる。

社会科において、あらためて思考・判断した結果をトゥールミンモデルに基づいて可視化することは、教師にとっても生徒にとっても評価の妥当性を高める上で適切な手段であると実感した。今後は、記述の場面でも発表の場面でも、常にD（事実）・W（理由付け）・C（結論）を明確に示しているかどうかで、根拠に基づいて考察しているかを判断していきたい。

学習課題に対する自分の考えを根拠立てて記述したり、発表したりする力は昨年度に比べると伸びてきているので、さらに自信をもって根拠を見分けられる力を育成していきたいと考える。そのために、個人での活動・小グループでの活動を工夫し、発表や討論の場面を充実させていきたい。

そして、ワークシートやレポートによる可視化を通して、今まで以上に社会的事象を様々な側面から多面的に捉えることと、様々な立場に立って多角的に捉えることを意識させながら他者と意見交流をさせるようにしていきたい。そのことで、自分では気付かなかった視点からも社会的事象を見つめ直すことができるようになり、学習テーマの追究に深みが増すと考えられるので、今後も継続していきたい。

トゥールミンモデルを意識させていくことで、生徒一人ひとりの価値判断を含む思考の過程を評価しやすくなる。授業で随所に取り入れ、他教科の授業でも生徒が意識的に使えるようにしていきたい。

【 地理的事象を、多面的・多角的に捉えられた例 】

地理分野の 中国・四国地方について交通網が発達したもののストロー化現象により人が都市へと流れていってしまったということも習った時に多面的・多角的にものごとを考えることができたと思う。

私は、消費者側の考えと売り側の考えの違いとをえ、その状況と立場について考えることができた。その結果現在住んでいる石川県も交通網が発達してきていることや大都市とつながりやすくなることで中国・四国地方でもまたストロー化現象の状況に陥っているということや交通網が発達することにより起きるデメリットについて学ぶことができた。

【 他教科の学習で、多面的・多角的を意識できた例 】

家庭でアフリカのチョコレートの子童労働の問題負で消費者から見たら、安いチョコレートの方がいい人が多くいてアフリカの人たちから見たら、できるだけフェアトレードの商品を買ってほしいと思うと多角的に考えた。

- (1) 単元名 現代の民主政治（第4次中第2時）
- (2) 題材名 参議院を廃止すべきだろうか
- (3) ねらい
 - ・参議院廃止についての討論を通して、我が国の二院制や議院内閣制などの意義について、自分の考えをもつことができる。
- (4) 評価の観点と規準
 - ・参議院を廃止すべきかどうかについて、根拠に基づきながら多面的・多角的に考察することができる。

社会的な思考・判断・表現【観点②】
- (5) 本時の取組のポイント

本時は参議院の存在の是非について、国民や政党といった立場から歴史、経済、制度、人権といった側面を捉えさせ、討論を通して考察させることに重点を置いた。討論の中で様々な意見を聞くことで、多面的・多角的に事象を捉え、より深く考察させることができると考えた。また、根拠を明確にしてより論理的に考察させるために、トゥールミンモデルを利用することにした。
- (6) 本時の展開

学習活動・内容	教師の指導・支援及び留意点 ○評価と方法 []	時間
1 討論の論題を確認し、立論内容について同じ立場の者と意見交換を行う。	・ D, W, Cを見ながら、立論の根拠や立場が明らかであるかどうかを生徒に確認させる。 <div>参議院を廃止すべきだろうか。</div>	4
2 本時の流れを聞く。	・ 討論の後に自分の意見をまとめることを伝える。	2
3 討論を行う。 <ul style="list-style-type: none">・ 肯定側立論（5） 参議院を廃止すべき・ 否定側立論（5） 参議院を廃止すべきではない・ 作戦タイム（3）・ 自由討論（質問・反駁） (10)	・ 感情論にならないように既習事項を用いながら根拠を明らかにして考察するよう指導する。 ・ 同じような意見でも、根拠や立場の違いが考えられるため、なるべく多くの生徒に自分の意見を発表させる。 ・ 相手側の発言のメモをとるように指導する。 ・ 水掛け論が続く場合は教師が話題を変えるなど、多面的に意見を発表させる。	25
4 課題に対しての自分の考えをまとめる。	・ 根拠を明らかにして多面的・多角的に考察するように促す。 ・ 可能であれば、廃止、もしくは存続する上で、さらにどうすべきかを考えるように促す。 ○評価 参議院を廃止すべきかどうかについて、根拠に基づきながら多面的・多角的に考察することができる。 <div>[ワークシートの内容] 【観点②】</div>	15
5 意見を発表する。	・ 黒板にネームプレートを貼らせ、自分の立場を明示させた上で、意見を発表させる。	4

討論まとめ用紙

組 番 氏名

参議院を廃止するべきだろうか？

<立論内容>

- 参議院は衆議院との違いを付けず、全国区と地方区にわけた選挙制度をとっているが、今では衆議院と同じ選挙区と比例代表を取入れ、選挙制度にはなっている
- 昔は参議院に知識をもった無所属の人が多かったが、今では政党化してしまっている
- 国会議員1人に使われる税金は1億円以上である
- 参議院があることで、衆議院が可決するものに時間と手間がかかっている

(国民)の立場からすると

衆議院との違いを重視して作られた参議院だが、「衆議院のカボソコソレ」と言われるように衆議院に似てしまっている。そのため「良識の府」としての機能がうすくなってしまっている。経済的にも国会議員1人にのべかかる負担は大きく、国民にとっても負担も大きい。また、参議院を廃止すれば、衆議院が可決しやすくなり、政治がスムーズに進むと考えられる。

1.2 参議院を廃止するべきである

<今日の流れ>

- ①肯定側(廃止すべき)立論・・・5分
- ②否定側(廃止すべきではない)立論・・・5分
- ③作戦タイム・・・3分
- ④自由討論・・・10分

<廃止すべき>

- 法律の成立に時間がかかる
- わいせつ国会の原因
- 税金を多く使う必要性
- 衆議院と同じような議会
国民の政治参加の機会
99%の意見を反映
国民の権
- 短命政権
- 本来の仕事を怠る
内閣との関係がよい → 健全な判断
衆議院の判断
せま王門

立論メモ

<廃止すべきではない>

- 衆議院を減らす
→ 少数意見を中絶にできる
- 国民の政治参加の機会
- 99%の意見を反映
国民の権
- 内閣との関係がよい → 健全な判断
衆議院の判断
せま王門

討論メモ

- じっくり考える機会
✓ 遅いほうがいい
- 衆議院の優越
- 同じ政党で力を押している
- 少数派の意見、個人の尊重・平等権

<自分の最終的な意見>

- 参議院は昔は衆議院とちがう選挙制度を取り入れていたが今は同じように選挙区と比例代表の制度にはなっている
- 昔は知識人が多くて占めていたが今では政党化している
- 衆議院が可決するために参議院と衆議院で審議される
- 国会議員1人あたりにかかる費用が大きい

(国民)の立場からすると

衆議院との違いを重視して作られた参議院が衆議院に似てしまっている。そのため「良識の府」としての機能がうすくなってしまっている。経済的にも国会議員1人にのべかかる負担は大きく、国民にとっても負担も大きい。また、参議院を廃止すれば、衆議院が可決しやすくなり、政治がスムーズに進むと考えられる。

(与党)の立場からすると

衆議院に通じたことも野党がいることで可決に時間がかかり、手間がかかる。また、わいせつ国会に近づきやすくなり、短命政権になりやすい。

そこで
二院制は衆議院の行主権を止めようというメリットがあるが、今では、衆議院と同じような議会となり、機能をうすく果たせられようとしていると考えられる。

よって、私は 参議院を廃止すべきだと思う。

<自己評価欄>

- A: できた B: 少しできた C: あまりできなかった D: できなかった
- ①根拠を明らかにして説明できた (A) B C D
 - ②正しい態度で意見を聴けた (A) B C D
 - ③聞き取りやすい発表ができた A (B) C D
 - ⑤複数の立場で考えることができた A (B) C D
 - ⑥複数の面から考えることができた (A) B C D

(7) 授業の考察

本単元では国会・内閣・裁判所のしくみや働き、行政改革、裁判の種類や裁判員制度について学習する。教科の目標である「国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」のためには既習の人権や憲法の理念が現実の政治の中でどのように位置付けられているのかを理解させ、効率と公正、対立と合意といった視点から政治のしくみを見ることで、政治に対する見方や考え方の基礎を身に付けさせる必要があると考えた。

そこで本時は二院制や議院内閣制などの意義について考察するために「参議院を廃止するべきか」という課題を設定し、制度、人権、歴史、経済といった側面から考察させることにした。

また、既習事項を根拠として考察させるために、単元を通して本時の考察に必要な資料や知識を学ばせ、計画的に学習を展開した。以下が本時までの流れである。

第1次 国会の地位としくみ

課題「なぜ参議院は「良識の府」と呼ばれるのだろうか？」（1時間）

衆議院と参議院の任期や被選挙権、解散の有無、法案が成立するまでの流れといった資料を基にして多面的に考察させた。

第2次 国会の働き

課題「国会議員にかかる税金は必要経費といえるだろうか？」（1時間）

衆議院の優越について説明し、国会の仕事や国会議員1人あたりに使われる税金や国会議員の収入、選挙の経費、政治とカネに関する論評などの資料を基にして多面的に考察させた。

第3次 行政のしくみと内閣

課題「ねじれ国会は行政にどのような影響をもたらすのか？」（1時間）

議院内閣制について説明した後、2005年から2013年までの内閣の変遷と衆議院・参議院の議員数の変化の資料を基にして、ねじれ国会において与党、野党、国民はそれぞれ何を望むかを多角的に考察させた。

第4次 参議院を廃止するべきだろうか（2時間）

第1時 参議院成立の歴史

参議院設立の過程、第一回参議院選挙の方法と結果などの資料を提示し、解説した。その後、討論について説明し、学級を機械的に2つに分け、立論の準備をさせた。

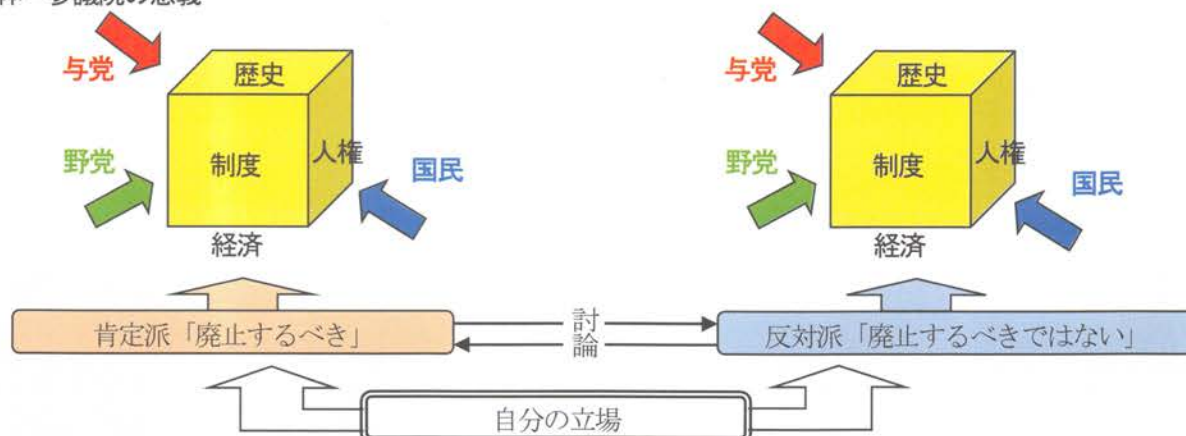
第2時 討論とまとめ 【本時】

本単元のこれまでの学習内容を基に討論を行った。

この授業における多面的・多角的な考察については、次のようなイメージで表わすことができる。

課題「参議院を廃止するべきだろうか？」

立体＝参議院の意義



本時のまとめを評価する中で、多くの生徒が多面的・多角的な考察を行うことができていた。また、国民や与党・野党といった立場で考える生徒が多かったが、上のイメージで示したように、討論全体を俯瞰的に捉え、肯定派・反対派といった立場を比較することで自分の意見をまとめる生徒もみられた。

(8) 成果と課題

<成果>

○多面的・多角的な考察に対する討論の有用性

年末のアンケートでは「参議院の討論の授業で多面的・多角的に考察できた」という意見が非常に多くみられた。討論を通して多くの意見を聴くことで、社会的事象がもつより多くの側面を、より多くの立場から捉えることができる。さらに俯瞰的視点から事象を捉え、肯定派・反対派の異なる立場から多角的に考察することも可能となる。より多面的・多角的に考察する力を身に付けさせる上で、討論は有効な学習活動の一つであると考えられる。

○論理的に考察する力の向上

根拠を明確にし、論理的に考察する力を身に付けさせるために、第1学年の終わり頃より、トールミンモデルを用いた学習を進めてきた。12月に行ったアンケートによると、他教科の学習でもトールミンモデルを用いる生徒がみられた。生徒自身が思考の流れを可視化し、根拠を明確にすることの有用性を理解したからこそ、他教科での利用を試みたのではないかと考えられる。また、昨年度のアンケート結果と比べると、「考察に必要な根拠が見分けられるか」という問いに対して「何が根拠かの見分けがついていると思う」と答えた生徒は53人から69人へと増加した。

<課題>

○自分の立場からの考察

多角的に社会的事象を捉えるために、様々な立場に立って考察することは重要である。しかし、最終的には国家・社会の形成者たるために、生徒自身が自らの立場で意見をもてるような指導を行っていかねばならない。複数の立場から多角的に考察させて終わるのではなく、様々な立場から多角的に考察した結果を基にして、最終的に自分の立場から価値判断が行えるような課題を工夫していくべきだと考える。

○代替案を視野に入れた考察

本研究を通して二者択一の課題を意図的に設定してきたが、参議院に関する討論の授業では、参議院廃止の是非だけでなく、いずれの結論においてもさらにどうするべきかを考えるように促した。しかし、それについて書いた生徒は一部に過ぎなかった。これまで二者択一の価値判断を中心に授業実践を重ねてきたが、さらに進んで代替案の提示を視野に入れた学習の必要性を認識した。このような考察はESDの学習において重要とされるクリティカルシンキングにつながるものであり、今後さらに生徒達に求められていく力である。今後は物事を批判的に捉え、代替案を含めて考察する力の育成が課題である。

○学習内容と現実社会との結びつきの強化

公民的分野の授業を進めていくなかで、生徒が学習課題をいかに自分に関係する問題として捉えられるかが重要であると感じた。多面的・多角的な考察の場面を設定しても、こうした生徒の姿勢がなければ思考の深まりは不十分であった。生徒の関心・意欲を喚起し、より深い考察を促すために、現実社会に結びつけて考えることができる学習課題の設定や教材作成が必要である。

授業「参議院を廃止するべきだろうか」(第4次中第2時)の板書



第1学年

<地理的分野>

○2章 世界各地の人々の生活と環境（多面的）

- ・課題 「イサムくん（イヌイットの子ども）は20年後にどのような暮らしをしているだろう」
イヌイットの伝統的な暮らしが変化してきた原因を、自然条件と社会的条件の側面から考察させ、イヌイットの子どもの将来について考えさせた。

○3章 世界の諸地域① アジア州（多面的・多角的）

- ・課題 「なぜ東南アジアでは急激に経済成長が進んでいるのだろう」
政府と外国の企業の2つの立場から、タイの経済成長の背景を、自然、歴史、政治、経済の側面から考察させた。

○3章 世界の諸地域② ヨーロッパ州（多面的・多角的）

- ・課題 「EUは一つの国になるべきか」
EUの課題について、複数のEU加盟国の立場から、政治、経済、文化、安全保障などの側面から考察し、ヨーロッパ州の地域的特色を説明させた。

○3章 世界の諸地域③ アフリカ州（多面的）

- ・課題 「なぜ、アフリカには経済的に貧しい国が多いのだろう」
アフリカの経済の特色であるモノカルチャー経済を、自然、歴史の側面から考察させた。

○3章 世界の諸地域④ 北アメリカ州（多面的）

- ・課題 「超大国アメリカにとって代わる国は出てくるか」
アメリカ合衆国の地域的特色を、資料に基づき「〇〇大国」という言葉で多面的に表し、それら全ての側面でアメリカ合衆国を上回りそうな国はどこか、あるいは存在しないかを説明させた。

○3章 世界の諸地域⑤ 南アメリカ州（多角的）

- ・課題 「ブラジルの急激な経済成長はどのように進められてきたのだろう」
アマゾン流域で進められている開発とその影響を、開発を進める政府と企業、開発に巻き込まれる先住民の立場から理解させた。

○3章 世界の諸地域⑥ オセアニア州（多面的）

- ・課題 「ここ50年ほどでオーストラリアの貿易相手国が大きく変化したのはなぜだろう」
オーストラリアとアジアの結びつきが強くなったことを、オーストラリアの歴史や政治、貿易相手国の経済や地理的な位置などの側面から考察させた。

<歴史的分野>

○1章 古代までの日本

- ・課題 「律令国家を支えていたものは何だろう」
律令国家のすがたを、貴族と農民の2つの立場から、衣食住、税や兵役負担などの側面から捉えさせ、人々の格差と土地制度の問題から律令国家が崩れていくことを説明させた。

第2学年

<地理的分野>

○2章 世界からみた日本のすがた 世界と日本の結びつき (多面的・多角的)

・課題 「国内の交通・通信網の整備は、みんなを便利にしたか」

都市部に住む人々と地方に住む人々の立場から、よりよい交通・通信網の整備について、人口、経済、環境の側面から考察させた。

○3章 日本の諸地域① 九州地方 (多角的)

・課題 「チッソは今後も存続されるべきか」

水俣病を引き起こしたチッソ (化学工場) の存廃問題について、住民、従業員、被害者の立場から考察させ、それぞれの立場から簡単な討論を行った。

○3章 日本の諸地域② 中国・四国地方 (多面的・多角的)

・課題 「過疎地域に住む人々にとって、よりよいまちをつくろう」

山間部の農村と臨海部の漁村の立場から、過疎地域にとってのよりよい暮らしについて、人口、自然環境、産業、交通の側面から捉えさせ、過疎地域の町おこし・村おこしの意義を考察させた。

○3章 日本の諸地域③ 近畿地方 (多面的・多角的)

・課題 「大阪のまちは、どのように発展し変化してきたのだろうか」

政府、大阪府民 (大阪市民)、消費者、小売業者、生産者の立場から、大阪のまちの発展と変化について、歴史、社会、自然環境、産業、人口、交通などの側面から考察させ、発表させた。

○3章 日本の諸地域⑤ 関東地方 (多面的・多角的)

・課題 「東京ディズニーランドが浦安に建設されたのはどうしてだろう」

経営者側と利用者側の立場から、東京ディズニーランドの立地場所について、自然環境、生活文化、産業、他地域との結びつきの面から捉えさせ、東京の都心部と公害の関係を考察させた。

○3章 日本の諸地域⑦ 北海道地方 (多角的)

・課題 「財政破綻した市を、君ならどうやって立て直すか」

財政破綻した夕張市の町おこしの方法について、政治、経済、自然環境などの側面から、市長になったつもりで考察させた。

○3章 日本の諸地域⑧ 日本をながめて (多面的)

・課題 「日本の地域的特色を様々な視点から捉えよう」

7つの視点 (自然環境、歴史、産業、環境問題や環境保全、人口や都市・村落、生活・文化、他地域との結びつき) から各地の地域的特色について考察させ、お互いの意見交流を通して解釈させた。その後、各自で自分の意見をレポートにまとめた。

<歴史的分野>

○4章 近世の日本① ヨーロッパ人との出会いと全国統一 (多面的・多角的)

・課題 「戦国大名は、キリスト教をどう受け止めたのだろうか」

戦国大名と民衆の立場から、キリスト教の意義について、貿易 (経済)、人権 (救済) や制度 (平等)、歴史の側面から捉えさせ、キリスト教の広がりを理解させた。

○4章 近世の日本② 江戸幕府の成立と鎖国 (多面的・多角的)

・課題 「家康はすごいやつか」

武士、公家、庶民の立場から、徳川家康が行った様々な政策について、政治、経済、文化、制度、人権の側面から捉えさせ、江戸幕府の政治に対する評価を行った。

○5章 開国と近代日本の歩み (多面的・多角的)

・課題 「明治維新を評価してみよう」

政府、平民 (農民、被差別民など)、士族 (武士) の立場から、明治維新について、歴史、政治、文化、経済、国際関係の側面から捉えさせ、江戸幕府滅亡直後に人々が新しい時代に何を望んだのかを考察させ、その望みが実現したかの検証を行った。その上で、生徒による明治維新の評価を行わせた。

第3学年

<歴史的分野>

○6章 二度の世界大戦と日本③ 第二次世界大戦と日本（多面的・多角的）

- ・課題「太平洋戦争は戦後の世界に何をもたらすだろうか」

日本、米国、中国、ソ連、東南アジア（植民地）の政府や国民の立場から太平洋戦争について思想、政治、経済、民族運動の側面から捉えさせ、終戦直後に新しい時代へ何を望んだかを考察させた。

<公民的分野>

○1章 わたしたちの生活と現代社会③ 現代社会の見方や考え方（多面的・多角的）

- ・課題「トラブルの解決に向けてどのような解決策を考えればよいだろうか」

サッカー部、ソフトボール部、陸上部の立場からグラウンドの使用割りについて使用時間、使用面積、練習内容などの側面から捉えさせ、よりよい解決策を考察させた。

○2章 人間の尊重と日本国憲法① 人権と日本国憲法（多面的・多角的）

- ・課題「憲法9条を改正するべきだろうか」

国民、自衛隊、政府、アメリカなどの立場から憲法9条の改正案について経済、権利（自衛権）、国際関係などの側面から捉えさせ、改正するべきかどうかを考察させ、討論を行った。

○2章 人間の尊重と日本国憲法③ 人権と共生社会（多面的・多角的）

- ・課題「男女が平等に暮らすためにはどのような工夫が必要だろうか」

国、企業（の社長）の立場から男女平等について賃金、育児、昇進などの側面から捉えさせ、より平等な社会をつくるための工夫を考察させた。

○3章 現代の民主政治と社会① 現代の民主政治（多面的・多角的）

- ・課題「日本の民主主義における政党の役割はなんだろうか」

高齢者、子育て中の親、会社員の立場から、マニフェストについて憲法、経済、社会保障、教育の側面から捉えさせマニフェストを基にどのように政党を選んでいくのかを考察させた。

○3章 現代の民主政治と社会② 国の政治のしくみ（多面的・多角的）

- ・課題「参議院は廃止するべきだろうか」

政党や国民の立場から参議院の意義について経済、制度（二院制）、歴史、人権の側面から捉えさせ参議院を廃止するべきかどうかを考察させ、簡単な討論を行った。

○4章 わたしたちの暮らしと経済① コンビニエンスストアの経営者になってみよう（多面的・多角的）

- ・課題「コンビニエンスストアをどこで開店するべきだろうか」

様々な利用者の立場から交通、土地利用などの側面から捉えさせ、コンビニエンスストアを開店するのにふさわしい立地条件について考察させた。

○4章 わたしたちの暮らしと経済② 働きやすい職場を築くために

- ・課題「なぜ非正規雇用が拡大していくのか」

非正規労働者や企業の立場から労働時間や雇用整理、収入、人件費などの側面から捉えさせ、非正規雇用のメリットやデメリットについて考察させた。

○5章 地球社会とわたしたち②

- ・課題「10年後の電源構成のベストミックスを考えよう」

日本のエネルギー政策（電力構成）の在り方を、政府、電力会社、企業、家庭、それぞれの立場から、各発電方式の長所及び短所の両面を捉えさせ、持続可能な社会の形成について理解を深めさせた。

社会科学習アンケート（1年生結果）

回答総数154／159

設問1 「多面的・多角的にものごとを考えること」について、あなたにあてはまる文の符号に○をつけてください。

- | | |
|--------------------------------|----|
| ア 多面的・多角的にものごとを考えられるようになったと思う。 | 31 |
| イ 多面的にはものごとを考えられるようになったと思う。 | 36 |
| ウ 多角的にはものごとを考えられるようになったと思う。 | 70 |
| エ どちらともできていないと思う。 | 17 |

設問2 多面的・多角的にものごとを考えるための「根拠」について、あなたにあてはまる文の符号に○をつけてください。

- | | |
|-----------------------------|-----|
| ア 何が根拠かの見分けがついていると思う。 | 13 |
| イ 何が根拠かの見分けはだいたいついていていると思う。 | 120 |
| ウ 何が根拠か見分けがつけられていないと思う。 | 21 |

設問3 あなたが、「多面的・多角的にものごとを考えること」ができたと思う学習内容は、どの分野のどんな社会的事象ですか。また、どのように考えることができ、その結果どんなことが学びましたか、具体的に説明してください。

【地理的分野】

★多面的・多角的

（世界各地の人々の生活と環境、EUの経済格差、EUの課題、アマゾン川流域の開発、グラフの読み取り）

★多角的

（世界各地の人々と生活と環境、中国の経済成長、東南アジアの経済成長、EUの課題、アフリカの課題と展望、アメリカの企業的な農業、アメリカの生活・文化、アマゾン川流域の開発、南アメリカの産業）

★多面的

（世界各地の人々の生活と環境、EUの経済格差、EUの課題、アフリカの産業、超大国アメリカ、南アメリカの産業、アマゾン川流域の開発、オセアニアとアジアのつながり、人口分布図の読み取り）

設問4 あなたは、社会科の学習以外の場で「多面的・多角的」なものの見方を意識したことはありますか。あてはまる符号全てに○をつけてください。また、「意識したことがある」という人は、どのようなときに意識しましたか。具体的に説明してください。

- | | |
|--------------------------------------|----|
| ア 他教科等の学習で意識したことがある（教科名や場面も答えてください） | 40 |
| イ 学校生活で意識したことがある（どのような場面かも答えてください） | 38 |
| ウ 学校外の生活で意識したことがある（どのような場面かも答えてください） | 56 |
| エ 意識したことはない | 44 |

【他教科等で意識】

- ・国語（古典での主人公以外の立場、論説文での賛成・反対の立場）
- ・数学（座標のような二つの数で位置が表されているものを見付ける、解き方を見付ける）
- ・理科（実験結果の考察） ・体育（攻め方と守り方）
- ・技術（製品の光と影） ・家庭（売り手と買い手の立場）
- ・道徳（様々な登場人物の立場、障害者の立場）

【学校生活で意識】

- ・話し合いの場面（相手の立場、グループの立場） ・友達付き合い（相手の立場）
- ・総務委員会（様々な立場の意見） ・部活動や委員会（先輩と後輩の立場）
- ・学級討議（特別委員会法案審議）

【学校外の生活で意識】

- ・旅行（石川県や金沢市との違い） ・習い事の発表（観客の立場）
- ・あいさつ（様々な意味） ・買い物（商品の情報）
- ・ニュース（政府の立場、国民の立場、当事者の立場） ・ゲーム（戦略） ・株価（上下の理由）
- ・読書（作品の背景や作者の意図）

社会科学学習アンケート（2年生結果）

回答総数150／150

設問1 「多面的・多角的にものごとを考えること」について、あなたにあてはまる文の符号に○をつけてください。

- | | |
|--------------------------------|----|
| ア 多面的・多角的にものごとを考えられるようになったと思う。 | 41 |
| イ 多面的にはものごとを考えられるようになったと思う。 | 48 |
| ウ 多角的にはものごとを考えられるようになったと思う。 | 56 |
| エ どちらともできていないと思う。 | 5 |

設問2 多面的・多角的にものごとを考えるための「根拠」について、あなたにあてはまる文の符号に○をつけてください。

- | | |
|---------------------------|-----|
| ア 何が根拠かの見分けがついていると思う。 | 20 |
| イ 何が根拠かの見分けはだいたいついていると思う。 | 121 |
| ウ 何が根拠か見分けがつけられていないと思う。 | 9 |

設問3 あなたが、「多面的・多角的にものごとを考えること」ができたと思う学習内容は、どの分野のどんな社会的事象ですか。また、どのように考えることができ、その結果どんなことが学べましたか、具体的に説明してください。スペースが足りなければ、裏面を使用してもよいです。

【地理的分野】

- ★多面的・多角的（再生可能エネルギー、北陸新幹線開業の影響、人口問題、夕張市の財政破綻、北海道の開拓、京都市新景観条例、近畿の生活の営み、立地条件から考える原発建設場所、日本の諸地域の比較、関東地方と他地域との結びつき）
- ★多面的（東北地方、中部地方の産業）
- ★多角的（中国地方の過疎問題と町おこし、平和都市広島、沖縄の観光化、東日本大震災、東京の一極集中、水俣病をおこした工場の存廃、交通網の発達、北陸の伝統産業発達の理由）

【歴史的分野】

- ★多面的・多角的（キリスト教の広まり、十字軍の遠征、鎖国政策、江戸時代の年貢率の増加、江戸時代の三大改革、田沼の政治）
- ★多面的（地方の特色、地域で起こっている出来事、豊臣秀吉が目指した国づくり）
- ★多角的（大航海時代、土農工商、南蛮貿易、異国船打払令、戦国時代の封建制度、太閤検地や刀狩、参勤交代、宗教改革、朝鮮出兵、キリシタン大名）

設問4 あなたは、社会科の学習以外の場面で「多面的・多角的」なものの見方を意識したことはありますか。あてはまる符号全てに○をつけてください。また、「意識したことがある」という人は、どのようなときに意識しましたか。具体的に説明してください。

- | | |
|--------------------------------------|----|
| ア 他教科等の学習で意識したことがある（教科名や場面も答えてください） | 70 |
| イ 学校生活で意識したことがある（どのような場面かも答えてください） | 43 |
| ウ 学校外の生活で意識したことがある（どのような場面かも答えてください） | 41 |
| エ 意識したことはない | 24 |

【他教科等で意識】

- ・国語（古典、随筆、意見文、評論文）・数学で問題を解く時 ・家庭科のフェアトレードの授業
- ・理科（実験結果のまとめ、予想を立てる時、生物の分類で順位付けをする時）

【学校生活で意識】

- ・自分の発言が相手に与える影響 ・自分で書いた文章を他の立場に立って読んでチェックした
- ・友達と話をする時や友達のけんかを止める時に相手の立場を考えた
- ・ある活動を行うことで期待される効果と出てくる不満を考えた
- ・イベントを決めるとき、運動の得意な人と苦手な人の立場から内容を考えた
- ・部活動のとき、みんなから文句が出ないように、みんなの立場で考えた
- ・部活動の試合で他校へ行ったとき、ホスト校の気持ちになってマナーを守った
- ・行動する前にみんなのことを考えて、周りに配慮しながら先のことを考えるように意識した
- ・発表している時や聞く時に、先生の立場になって考えている

【学校外の生活で意識】

- ・海外旅行（視点を変えて国際問題を見た、気候や産業などを考え、実際に発見・実感した）
- ・友達や家族と話をする時 ・相手を傷つけた時 ・消費税増税 ・習い事で新旧の練習方法を比較した
- ・北陸新幹線開通に関するニュース ・ニュースを見る時、他の国はどう思っているか
- ・TPP参加交渉や増税のニュース ・お年寄りが多いバスに乗る時、次のバスに乗るようになった
- ・裁判を見る時 ・家に入る時、掃除の手間を省くためにしっかりと泥を落としてから玄関に入った

社会科学習アンケート（3年生結果）

回答総数154／156

設問1 「多面的・多角的にものごとを考えること」について、あなたにあてはまる文の符号に○をつけてください。

- | | |
|--------------------------------|-----|
| ア 多面的・多角的にものごとを考えられるようになったと思う。 | 105 |
| イ 多面的にはものごとを考えられるようになったと思う。 | 18 |
| ウ 多角的にはものごとを考えられるようになったと思う。 | 28 |
| エ どちらともできていないと思う。 | 3 |

設問2 多面的・多角的にものごとを考えるための「根拠」について、あなたにあてはまる文の符号に○をつけてください。

- | | |
|---------------------------|----|
| ア 何が根拠かの見分けがついていると思う。 | 69 |
| イ 何が根拠かの見分けはだいたいついていると思う。 | 83 |
| ウ 何が根拠か見分けがつけられていないと思う。 | 2 |

設問3 あなたが、「多面的・多角的にものごとを考えること」ができたと思う学習内容は、どの分野のどんな社会的事象ですか。また、どのように考えることができ、その結果どんなことが学べましたか、具体的に説明してください。裏面を使用してもよいです。

歴史的 分野	★多面的・多角的	・第二次世界大戦後、各国の政府や民衆は新しい時代に何を望んだだろうか ・第二次世界大戦後、大戦後の世界は「平和」と「争い」のどちらへ進んだだろうか
	★多面的	・ドイツ国民はなぜナチスを支持したのか
	★多角的	・世界恐慌に対する政策が行われた背景について
公民的 分野	★多面的・多角的	・トラブルを解決するためには ・憲法9条を改正するべきかの討論 ・市長としてどのような施設をつくるか ・コンビニエンスストアをどこにつくるか ・タクシーの規制緩和は何をもたらしたか ・なぜ非正規労働者の雇用が増加するのか ・地方自治の変化は、どのような影響をもたらすか ・模擬裁判の判決 ・よりよい政治のために私たちに何ができるか ・参議院を廃止するべきかの討論 ・流通の学習で、生産者や消費者の立場から効率と公正について考えた。
	★多面的	・消費者の権利について
	★多角的	・価格の動き

設問4 あなたは、社会科の学習以外の場面で「多面的・多角的」なものの見方を意識したことはありますか。あてはまる符号全てに○をつけてください。また、「意識したことがある」という人は、どのようなときに意識しましたか。具体的に説明してください。

- | | |
|--------------------------------------|----|
| ア 他教科等の学習で意識したことがある（教科名や場面も答えてください） | 64 |
| イ 学校生活で意識したことがある（どのような場面かも答えてください） | 43 |
| ウ 学校外の生活で意識したことがある（どのような場面かも答えてください） | 58 |

他教科等 で意識	・国語の短歌の学習で、関連する人々の立場から、歌を巡る物語や時代背景について考えた。 ・国語の物語文を読むとき、登場人物の視点から話の内容について考えた。 ・数学で、この方法は簡単だけど他の方法でも解けるかな、と自然に考えるようになった。 ・理科のクローンは是非に関するディベートで、患者や技術者や家族の立場から経済や倫理、メリットやデメリットなどについて考えた。 ・総合的な学習の時間で金沢ガイドブックをつくる時、自分の立場だけでなく見る側は何を求めるか、どういう内容を必要としているかということ考えた。 ・体育のバスケットボールで自分がどう動けば、味方や相手に対して意図した影響を与えられるか考えた。 ・美術でテーブルカッターをつくる時に、使いやすさやデザインなどを考えた。
	・生徒会で運動会の準備を行う際、運営側と競技者側、各学年の立場などを考え、ルールや競技順番などを考えた。 ・委員会の話し合いで、どのようなことを話せば内容が広がるか考えた。 ・研究発表会のまとめや考察を考えるときに考えた。 ・委員会です仕事を割り振るとき、効率と公正、全委員の立場を考えて割り振った。 ・クラス劇のときに様々な役職の人の立場から演技・台詞・照明・音響などの意見を聞いた。
学校生活 で意識	・生活保護をもらっている人が多くなってきていることを知り、国にとってどういうことか、消費税が関係しているのかなど他の立場や関係性を考えた。 ・国際関係（領土問題など）で日本の立場、相手国の立場から考えた。 ・訴訟問題で、被告や原告の立場、それぞれの生活や法律などについて考えた。 ・自分のとった行動に対して、他の人がどう思うか、どんな影響がでるかを考えた。 ・店員が何かを勧めてきたとき、自分はそんなに欲しいと思わないが、店員の立場だとどのような気持ちや考えで勧めてきたのかを意識した。 ・2つのうちどちらかを選ぶとき、自分や他人の立場、時間や気分、体調について考えた。

4. 成果と今後の課題

(1)「多面的・多角的」な考察の定着

右のアンケート結果より、同一学年を見た場合、学年が上がるにつれて「多面的・多角的」に考察できる割合が増加している。また、各学年を比較した場合、1年生より3年生の方が「多面的・多角的」に考察できる割合が高い。以上のことから、多面的な考察 → 多角的な考察 → 多面的・多角的な考察といったスパイラル構造を意識することで、「多面的・多角的」な考察が身に付いていくことが分かった。

4月に比べてどのように考察できるようになったと思うか				
	多面的・多角的に考察することができる	多面的に考察することができる	多角的に考察することができる	どちらもできていない
H25 1年生	20%	23%	46%	11%
H24 1年生	20%	28%	43%	9%
H25 2年生	27%	32%	37%	3%
H24 2年生	58%	18%	22%	2%
H25 3年生	68%	12%	18%	2%
※H24 1年生 155人 2年生 155人			12月にアンケート実施	
H25 2年生 150人 3年生 154人			12月にアンケート実施	

また、「多面的・多角的」に考察できなかったが、「多面的」「多角的」のいずれかの捉え方から考察できたという生徒が多くみられたことは、「多面的」「多角的」に分けた成果だと考えられる。

しかし研究を進める中で、立場が決まれば、見るべき事象の側面が見え、立場が変われば見るべき側面も変わり、結論も変わる可能性が出てくるなど、社会的事象のもつ側面と事象を捉える角度との深い関連が明らかになった。教科目標の達成に向けて「多面的」「多角的」の両者は切り離せないものであり、「多面的・多角的」に社会的事象を捉え、考察することの重要性を改めて認識した。

(2) 比較・関連付けの促進

異なる立場や見方から社会的事象を捉えることで比較して考察しようとする思考の型が、また社会的事象のもつ複数の側面を扱うことでそれらの情報を関連付けようとする思考の型がそれぞれ身に付き、より深く社会的事象の意味や意義を理解できると考えられる。「多面的・多角的」という社会科特有の思考の型は、比較、関連付けといった考え方を一層促していくことが確認できた。また、逆に比較、関連付けを意識した指導を行うことで、「多面的・多角的」な社会的事象の捉え方が身に付くことも確認できた。

(3) 日常生活における思考力の活用

「多面的・多角的」な捉え方が学習活動における思考の深まりを促すだけでなく、生徒の日常生活に生かされることによって、一面的に終わらない現代社会の理解が可能となった。社会科の目標である「公民的資質の基礎」の育成に直結する取組としての重要性が確認された。

(4) 課題と今後の取り組み

右のアンケートから、生徒は根拠の重要性について理解を深めたものの、何が考察の根拠となるかについてはいまだ自信をもてない状況が一部に見られる。資料の読解力を高める学習を取り入れるとともに、評価を工夫し、それを積極的に生徒にフィードバックすることで、その課題解決を検討している生徒の自信を引き出す必要がある。

「多面的・多角的」な考察に必要な根拠が見分けられるか。			
	何が根拠かの見分けが付いていると思う	何が根拠かの見分けはだいたい付いていると思う	何が根拠かの見分けが付いていないと思う
1年生	8%	78%	14%
2年生	13%	80%	6%
3年生	45%	54%	2%
※1年生 154人 2年生 150人 3年生 154人 12月にアンケート実施			

また、研究を進める中で、「多面的・総合的に考える力」といったESDの視点を取り入れた学習指導との関連が深いことが分かった。そこで、今後はESDの視点を取り入れた学習指導を展開していくためにも、実践事例を蓄積し、年間指導計画に位置付け、研究を継続させる計画である。